

本調査の結果から見えてくる 妊娠期から子育てスタート期への移行の特徴

❀ 「第1回妊娠出産子育て調査・フォローアップ調査」監修 お茶の水女子大学大学院教授 菅原ますみ

私たちは“健やかなペアレンティングこそ、子どもの育ちの豊かな土壌となるもの”というコンセプトのもとに、はじめてお子さんを持つ方々がよりスムーズに親へと発達していくためには、いま、どのような条件が大切なのかを明らかにすることを目的とした調査を企画し、2006年に「第1回妊娠出産子育て基本調査」として妊娠期および0歳～2歳のはじめてのお子さんを持つ4,479名のご両親を対象として横断的な調査を実施しました。本報告書では、この中で妊娠期から出産を経て0歳のお子さんのご両親となった方とその後追加で調査にご参加いただいた方を合わせた364組のご夫婦を、妊娠期から1年後の0歳時点へとフォローアップしたアンケート結果についてまとめています。


* 親への移行をよりスムーズにするもの

はじめての出産という大きなライフイベントを経て0歳児の子育てをスタートさせた親たちにとって、どのような要因がより健やかなペアレンティングに関係するのでしょうか。今回の調査結果から、妻の場合には、妊娠中に親になることに向けた心身の準備をしておくことが、よりポジティブな出産経験につながり、それが実際に子育てがスタートした後の親としての自信につながっていく、という流れがみえてきました。妊娠中、分娩、そして赤ちゃんとの生活の始まり、それぞれのステージで、夫を中心とする人々のサポートのなかでひとつひとつのイベントを丁寧にクリアしていくことが、よりスムーズな母親への移行につながっていくといえるでしょう。一方、夫が親としての自信を育てていくためには、子どもと実際に関わる体験を、妻と協力しながら実現していくことが重要であることがわかりました。子どもと遊ぶ、ぐずったときに落ち着かせる、寝かしつけなど、赤ちゃんにとって親に対する安心や信頼がはぐくまれるようなシーンでのパパの活躍が、父親自身の親としての自信の深まりと関係していたのです。同時に、就労時間の長い父親はこうした子育てへの参加頻度が相対的に低いことも明らかになりました。父親の発達に必要な家庭での時間をどうやって社会的に保証していくかということが今後の大きな課題であるといえるのではないのでしょうか。

* 夫婦の愛情のゆくえ

子育てスタート期には、不慣れな子育てに妻も夫も心身の負担は大きく、また夫婦間で葛藤が生じるような場面も多くなることが予想されます。今回の調査でも、妊娠期から子育てスタート期へと相手に対する愛情度は低下する傾向が認められました。とくに妻の場合はその低下が顕著であり、妊娠期に7割以上の妻が「夫を本当に愛していると実感する」と回答していましたが、1年後にはその割合は4割まで落ち込んでいます。妻の夫に対する愛情を支えるにはどのような要因が有効なのでしょうか。今回の調査結果では、夫の子どもへのかかわりの多さが愛情の低下を防ぐ効果を持つことがわかりました。新しい家族関係のスタートにとって、子どもと両親、そして夫婦が、ゆったりと向かいあえる心の余裕と時間の確保が重要であることがここでも浮き彫りになったといえるでしょう。これらのご家庭の0歳から1歳、2歳への子育ての変化やお子さんの発達について、今後の追跡調査のなかで引き続き検討していきたいと考えています。

「第1回 妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査 (妊娠期～0歳児期)」から読み取れるもの～調査検討委員会より～

 恵泉女学園大学大学院教授 大日向雅美

妊娠期の男女を対象として実施された「第1回妊娠出産子育て基本調査」(2006年調査)では、妊娠期を夫婦でいたわりあい、子どもが生まれてきたら、しつけに対しても夫婦で力を併せて親としての役割をしっかりと実行しようとする意識がうかがえて、調査対象の人々が出産や育児に前向きに臨もうとしている傾向がみられました。近年の少子化は今の若い世代が自己中心的な価値観を持ち、結婚や子育てに対しても労を厭って消極的なことに原因があるとする指摘がよく目につきますが、実態は若い世代の意識と乖離していることが明らかにされて、興味深く思われました。

さて、実際に子育てを始めてから、若い世代の意識と生活実態にどのような変化が現れたのでしょうか。その追跡調査の結果が今回、「第1回妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査(妊娠期～0歳児期)」報告としてまとめられました。その中で「子育てに自信が持てない」という回答が夫婦とも6割前後という数値が示されています。経験したことのない生活に入ってはじめての子育てをする訳ですから、親が自信を持てないというのは当然のことと思われます。むしろ、不安をどのように克服し親となっていくのか、その過程を周囲がどのように支援するかが大切です。この点に関して、就労時間が1日で11時間を越える父親は、11時間未満の父親に比べて育児不安が高いことに着目したいと思います。つまり父親にとって育児不安の高低と就労時間との関連性が高い傾向が認められた訳ですが、これは2007年の暮れに政府の少子化社会対策会議が決定した「子どもと家族を応援する日本」重点戦略の中で、「働き方の改革による仕事と生活の調和の実現」が打ち出された意義を裏打ちするものと言えましょう。

一方、夫婦間の愛情度の変化も多くの方々に関心をもたれる点かと思えます。「配偶者といると本当に愛していると実感する」との回答が、妊娠前と比べて夫婦とも減少していますが、夫の減少率は12.7ポイントに留まっているのに対して、妻は31.9ポイントも低下していて、愛の冷め方で夫婦間にギャップが見られます。もっとも、結婚生活は恋愛時代とは異なり、日常の生活をこなさなければならないのが現実であり、いつまでもハネムーンのムードが維持されるわけではないことは言うまでもありません。「愛している」という表現では言い尽くせない深い感情を丁寧に拾っていくことも、今後の本調査の課題かと思われませんが、全般的に相手の話に耳を傾け、仕事や家事・育児を分かちあう関係が減少していることをうかがわせる傾向が認められる点が気がかりです。夫は仕事に翻弄され、一方、妻は家事・育児に追われて、互いが語り合い、いたわりあう時間も心の余裕もなくしているところが、今後夫婦間の溝をいっそう深めるのではないかと懸念されます。

前述の重点戦略は働き方の改革とともに、すべての子育て家庭が安心して子育てにあたるよう、保育や地域の子育て支援の充実をもう一つの重要施策として打ち出しています。結婚や出産・子育てに夢を持って臨んだ若い世代の人々の希望が現実と向き合ったときに、厳しい実態の中でこれ以上乖離することのないよう、改めて重点戦略の施策の意義を捉える必要を痛感します。本調査の継続は、子育て支援の着実な推進に向けて世論を喚起していく一翼を担うものであると考え、今後の成果を期待いたします。



子どもと一緒にいることがすべてのスタート

子どもは生まれるとすぐに、自分の世話をしてくれる人との間に愛着関係とよばれる緊密な関係をつくります。そして、愛着関係を結んだ人のそばにいて安定した発達をとげてゆきます。逆に愛着関係がうまく成立しないと、発達に障害が起こりやすいことも明らかになっています。愛着関係を結ぶ相手は母親でなければならない、と考えられた時代もありましたが、現在では愛着を結ぶ相手は母親である必要はなく、また相手は1人だけではなくてもよいことが分かっています。

しかし、世間にはまだ愛着関係を結ぶ相手は母親でなくてはならないとか、母親以外の人には「母性」がないから、緊密な愛着関係は成立しないといった誤った考えかたがまだ残っています。

世の中の多くの父親が、なんとなく子どもに近づきがたく感じる背景には、こうした「子育ては母親でなくては」という誤解もあるかもしれません。

今回の「第1回妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査報告(妊娠期～0歳児期)」では、夫のなかにまだ子育てに自信がもてない人が60%以上もいることが明らかになりました。では、子育てに自信が持てない原因は为什么呢？

父親が子育てに自信が持てない理由は、母性がないからでしょうか？ しかし冒頭に書いたように、子どもと緊密な愛着関係を結ぶことができるのは母親である(母性がある)からではないことは明らかになっています。

今回の調査では、育児に自信が持てない父親は、父親であるからではなく、子どもと接する時間が少ないからであることが明らかになりました。つまり、父親であるから育児に時間が持てなくなるのではなく、子どもと接する時間が少ないから、自信が持てないのです。

最初は慣れない仕事でも、次第になれるにしたがって、自信がついてくるものです。子育ても何も特別なことではなく、経験をつむことで自信がついてくるものなのです。

子どもと一緒に過ごす時間が増えると、おのずから子育てへの自信がついてくるだけでなく、夫婦関係にもよい影響が現れます。妊娠期に比べて0歳児期になると、妻も夫も配偶者に対する愛情が一定程度低下します。新しい家族である子どもに関心が向かうことがその大きな要因でしょう。しかし、配偶者への愛情の低下が少ない夫婦を調べてみると、夫が育児や家事を手伝う時間が多い夫婦なのです。

本調査から明らかになったことは、夫が子どもといる時間を増やすという単純明快な施策こそが、父親の子育て参加を促し、安定した家庭を作り上げるうえで最も効果的であるということです。



日々のニュースにとりあげられる乳幼児の親には、育児について無関心、自己中心的で未熟といったイメージにあふれています。しかし2006年から始まった本プロジェクトの調査結果から、メディアで取り上げられる事例の背後には多くの「普通の」父親と母親が存在することを実感しています。今回の追跡調査の報告でも、その期待は裏切られませんでした。子どもを産もうと思った理由は両親とも「子どもが欲しい」「好きな人との子どもを持ちたい」「子どもがいると生活が豊かになり楽しくなる」といったものです。本調査の回答者の多くは、おなかの子どもの性別に特別にこだわることなく、日々大きくなるおなかの外見上の変化を喜ばしく受け止めています。また、妊娠・出産・育児に伴う困難はあっても、子どもによいと思う育児を精一杯やり、「子どもを育てることに充実感を味わっている」と回答し、日々一生懸命である様子が伝わってきます。

子どもの母親のストレスは、父親の实际的・情緒的サポートと深くかかわっています。これは、ここ数十年のいくつもの研究によって繰り返し立証されてきました。本調査ではさらにすすめ、どのような父親が母親をうまくサポートできるのかについて明らかにし、そのような父親は、育児・家事能力があり、子育てに自信があると回答していると報告しています。育児・家事は日々同じことの繰り返しが多く、要領や手際のよさにはある程度の経験の質と量が必要となります。特に、同じ人から同じ方法で世話されることは、0歳児本人にとっては安心感をもたらし、泣きやぐずりの少なさ、つまり親にとっての子育てのしやすさ・自信につながることでしょう。「第1回妊娠出産子育て基本調査」(2006年調査)の結果でも、父親は決して育児に無関心ではなく、むしろ子育てに積極的に参加したいと望んでいることがわかっています。しかし、それを阻むものは父親の就労時間の長さという結果となりました。今回の調査では育児期の父親の1日の実働時間の最多回答は10時間でした。育児期の父親の約半数が10時間以上という驚くべき数字です。我が国が、いかに育児期の父親にとって厳しい社会であることを示しています。

寝かしつけやおむつ替えなどの日々の世話や、ぐずったときの落ち着かせるといった育児には、育児書を読んだり、病院主催のプログラムへの参加経験がある父親のほうがより多く行っているという結果となりました。これからの子育て・育児に関する父親向けのプログラムは、育児期の父親力を高めるものであると同時に、父親の就労時間が長すぎる現状に即したものが求められるといえるでしょう。しかし、本質的な問題は、育児支援サービスの内容や利用しやすさのみにあるわけではありません。父親が育児支援サービスの成果を発揮できるような労働状況を提供することが、長い目で見れば社会全体にとって大きなメリットとなるというコンセンサスを得ることが重要です。父親・母親にとって乳幼児期とは、親としての華の時代です。有意義な子育て体験が、豊かな次世代を育むことは疑いようがありません。母親だけでなく、父親も育児を楽しむこと、それが豊かな関係性の循環を作り出すのです。364組という膨大な対象者に調査を行った今回の調査報告書の意義は、我が国の子育て支援がいかにあるべきかという視点のみならず、その科学的な根拠をもたらしてくれたことにあります。